



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
<http://www.kokubunken.or.jp/>
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

コロナ禍の今年は、聖徳太子千四百年御遠忌 —ポストコロナに備へて、心を磨く学びを—

池松伸典

七月十二日、東京都に新型コロナウイルス感染症対策に伴ふ四度目の「緊急事態宣言」が発令された(期間は八月二十二日まで)。七月二十三日開幕のオリンピックは多くの会場で「無観客開催」となった。関係者の判断には苦慮すること多きものがあつたと思ふが、この危機的状況を国民としてどのやうにして乗り越えていくべきかといふ国家の行く末を見据えた議論は稀であつた。毎日繰り返される「感染者数」をめぐる報道を見てみると、わが身の事のみに関心が集中してゐる感じである。

今年(こゝね)は聖徳太子千四百年御遠忌に当る。これを記念する催しが各地で行はれてゐる(例へば特別展「聖徳太子と法隆寺」於・東京国立博物館、九月五日まで)が、連日のコロナ禍やオリンピック関連の話題の陰に隠れてしまつたやうで残念である。

聖徳太子は「和を以て貴しと為す」との憲法十七条の御言葉に窺はれるやうに、我が国が内外共に多難な時期にその克服の礎を築かれて、日本人として歩むべき道をお示しになつたお方である。いま数人の仲間と太子の御言葉に学ぶ勉強会を持つてゐるが、現今のやうな時にこそ先人の生き方に学ぶことの大切さが思はれてならない。

太子は勝鬘経、維摩経、法華経の三仏典についての注釈書「三経義疏」を遺されてゐる。その内の「法華義疏」(安樂行品)の中に次の御言葉がある。

「若し能く此の四の行を修せば、上はすなはち諸仏の称嘆するところとなり、中はすなはち諸天の護念するところとなり、下はすなはち諸人の恭敬するところとなり。然れば、すなはち復た悪世なりと雖も、刀杖の

困や、悪鬼入身の乱れを憂ふることも無く、況や復た求名比丘毀謗の辱や、悪僧邪律の噴ををや。」

この箇所は、お釈迦様がお亡くなりになる間際に、自分が亡くなつた後この尊い教へをどのやうにして後世に残していけるだらうかご心配になる場面である。菩薩は身を惜まずこのお経を護り伝えていきますからご心配なさらないでくださいとお答へするが、その一方で多くの人達は、仏滅後に世の中は悪世となつて様々な苦しみを受けるといふ話を聞いて、現実世界とは別の世界では尊い教へを奉じたいと条件をつけ加へる。お釈迦様の尊い教へに触れて自分もそれを大事にして他の者にも伝えていきたいと思ひながらも、それには並々ならぬ苦痛を覚悟しなければならぬことを知つて、初心が薄れてくるといふ内容である。その後お釈迦様は心を安らかにして悟りを得る方法をお示しになる。

太子はこの行を習得すれば「諸仏の称嘆」(多くの仏様に褒め称へられ)「諸天の護念」(天界の神々に護つていただき)「諸人の恭敬」(国民皆から敬はれる)となり素晴らしいことではないか、さうなると自らが被る様々な苦しみは大したことはないとおっしゃる。奥深く難しい内容であるが、心に残る御言葉である。自ら

のためよりも国民のために尽くさうと務められる太子のお姿が浮んでくるやうである。

さて、今夏の第六十六回全国学生青年合宿教室《主会場》は、本紙六月号の記事及び折り込みでお知らせしたやうに八月二十八日(土)、二十九日(日)の両日、感染症対策のため已むなく「日帰り」での開催となつた(於・東京渋谷区、オリンピック記念青少年総合センター)。一日目には評論家・江崎道朗先生による講義「DIME—外交、インテリジェンス、軍事、経済—から国際情勢をいかに読み解くか」を予定してをり、一刻変化する国際情勢の現実を語つていただくことになつてゐる。二日目には筑波大学非常勤講師・伊勢雅臣先生から「国史を貫く『大御宝』の理想」と題する講義をいただく予定である。昨秋、御鎮座百年を迎へた明治神宮の参拝も予定してゐる。現状をはつきりと見定めながら、「先人の歩みとその御言葉」をしるしつつ、自らの生き方を考へていく契機になればと願つてゐる。

コロナ禍への対処で日々追はれてゐるが、いづれポストコロナにおいて何を大切にすべきかを改めて問はれる時がくる。今のこの時期にあつても心を磨く学びが必要である。

(若築建設(株) 東京支店)